

特 253

25

十三年三月十九・二十・二十一日

鄉土勤皇事績展覽會
陳列資料關係人物略傳

市立名古屋圖書館

始

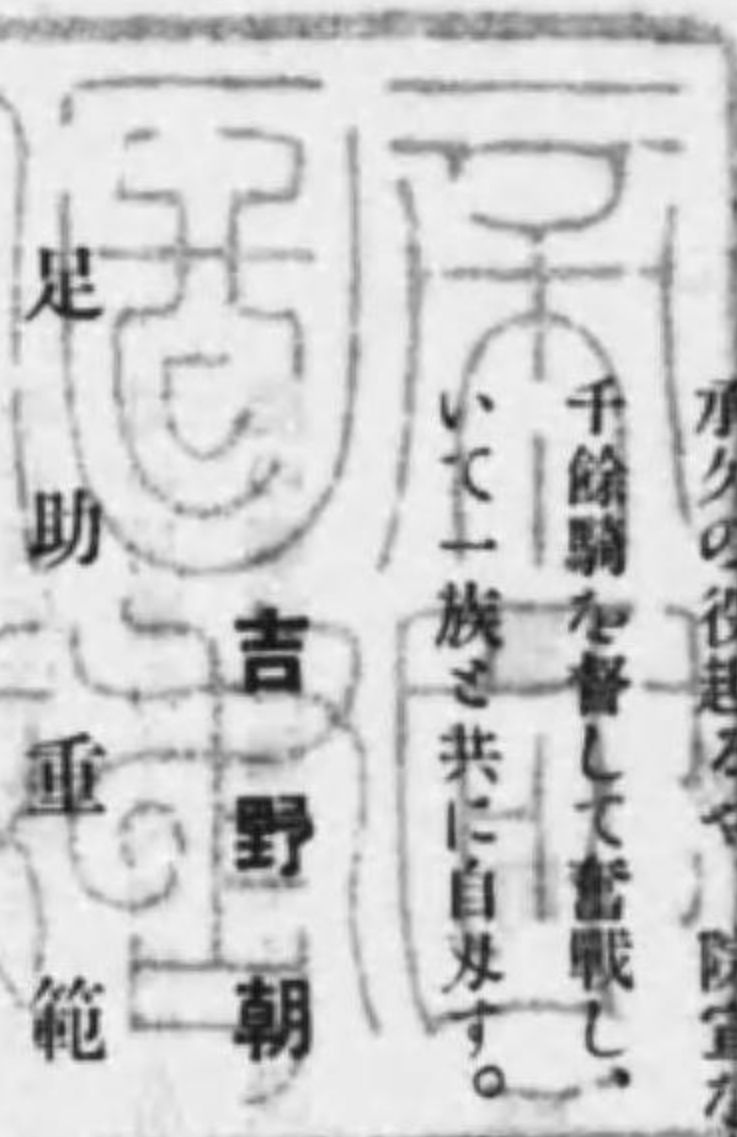


特253
25

鎌倉時代

山田重忠

次郎と稱し、勇武にして才幹あり、源氏の裔にして、祖父重直より、尾張春日部郡皇室御料山田莊の庄司たり。承久の役起るや、院宣を奉じ、洲股・杭瀬川に力戦奮闘せしも及ばず、命により宇治勢多にて、叡山の僧兵等三千餘騎を督して奮戦し、一時は賊軍をして戦を中止するに至らしめしも、遂に支ふる能はず、京に入り嵯峨に於いて一族と共に自決す。時に承久三年なり。大正六年正五位を追贈せらる。



吉野朝時代

姓源氏。滿政の裔、重秀より皇室御料足助に住し、足助冠者と稱す。重範次郎と稱し性勇武強弓長箭を善くす。元弘の役、密勅を奉じ上洛、元弘元年九月六日笠置山に強弓善く賊軍を挫き、以來廿余日能く防戦に努め、賊將夜半山背より放火、行在所に迫るに及び、重範城兵を指揮奮戦せしも、城陥り官軍潰亂中、天皇の遷幸を全うせんとて、力戦中捕へられ、元弘二年五月三日六條嶺に斬らる。年三十二、又は四十一。一族皆勤皇の士にて、就中重春宗良親王を井伊城より三河に迎えんとして果さず、延元中、後醍醐天皇より御感狀を賜る。明治廿四年重範に正四位を、更に昭和八年從三位を追贈せらる。



藤原昌能

季範の裔、宗範の次子、世々熱田大宮司たり。元弘建武の際王事に力を效す。建武二年、時行叛き、その將三浦時經、海路熱田に逃るるを捕ふ。同年、新田義貞、尊氏鎌倉に叛くを討つ。昌能鷺坂に破りしも義貞籍根に敗れ、昌能共に歸京す。延元元年尊氏京を犯せし時、後醍醐天皇に從ひ、叡山に供奉、後歸り削髮し、源雄と號す。又北畠顯家を助け近畿に轉戦、興國元年鵜屋義助美濃に敗れ、昌能の居城羽豆崎城に隱れ、伊勢より吉野に入る。正平廿四年宗貞親王上野・信濃より大山を経て、此城に留り給ひ、舟行伊勢より吉野に入り給ふ。羽豆崎は世々大宮司の居城ありて知多半島南端に在り。要衝の地にて海路伊勢吉野と聯絡し物資を輸送せし勤皇黨源地なりき。昌能の事績に就いては諸説ありと雖も今は大日本史列傳に據る。

室町時代

平手政秀

初名は清秀、五郎左衛門又は中務丞と稱す。經秀の子にして姓は源氏、織田信秀に仕へし老臣なり。天文十二年、信秀の命を奉じ、京に入り錢四千貫文を皇室に上る。信秀の子信長の傳たりしも、信長家を繼ぎて操行修らず。遂に諫死す。時に天文二十二年なり、年六十二。信長その死を嘆き、一字を小木村に建立して政秀寺と稱す。

織田信秀

信長の父。彈正忠と稱し、後備後守と改む。初め勝幡城に在りて、斯波氏の被官清洲織田の三奉行の一より興起して濃尾三に勢力を振ふ。勇武智謀あり、特に勤皇の志厚く、天文十二年二月禁裡御築地御修理費四千貫文を献す。後奈良天皇親感斜ならず、女房奉書を賜ひて賞せさせ給ふ。又伊勢神宮の荒廢甚しきを以て、外宮假殿を造營し奉る。天文二十年歿す。年四十二。明治三十八年從三位を追贈せらる。

安土桃山時代

織田信長

天文三年生る。父信秀の偉業を承け桶狭間役後威名大に振ひ、永祿十年岐阜を攻略するや、正親町天皇使を賜て撰亂反正を託し給ひ、濃尾御料所の恢復を圖らしめ給ふ。同十一年京に入るや、先づ皇居の修理に努め、又禁裡御料を上り、朝臣のために徳政令を發して窮乏を救ひ、天正十年伊勢神宮を造營し奉る等よく父の遺志を完成せり。天正五年右大臣に昇る。同十年本能寺の變に歿す。年四十九。大正六年正一位を追贈せらる。

豊臣秀吉

天文六年尾張中村に生る。信長の偉業を繼承、天下に號令し、天正十三年内大臣、次で關白に任ぜられ、豊臣

の姓を賜ふ。翌年太政大臣に拜せらる。天正十六年 後陽成天皇の臨幸を聚樂第に仰ぎ 天子の尊嚴を天下に示し、且京都の戸税を以て供御に奉じ公卿の所領を復す。慶長三年薨す。年六十三。大正四年正一位を追贈せらる。

江戸時代

徳川義直

幼名五郎太、字子敬、敬公と諡す。家康の第九子。慶長五年大坂に生る。同十二年尾張に封ぜられ、元和二年名古屋城に入る。權大納言に至る。性沈勇寛弘、神を敬ひ學を好み、神祇寶典・類聚日本紀を著し、早く孔子廟を城内に營む。江戸時代文教興隆の運を開きしは、義直の功與る所多し。殊に皇室を尊崇し其著「軍書合鑑」卷末に「依王命被催事」と書す。曾孫吉通其の意を敷衍す。慶安二年薨す。年五十一。明治三十三年正二位を贈られしは即ち此の勤皇の精神を追賞せられたるものなり。

徳川吉通

尾張四代の藩主。幼名藏太郎、また吉郎、後に五郎太、字は子中、綱誠第十子。元祿二年江戸に生る。又名古屋城二之丸に生るの説あり。權中納言に至る。少小より學を好み、醫書に通じ、又國學及び神道を吉見幸和に、儒學を林鳳岡父子に學ぶ。藩祖義直の遺志を休し、善く其の遺著を讀みて、尊皇の精神を繼承す。そのこと近松茂

矩の著、「圓覺院様御傳十五ヶ條」の内に明らかなり。正徳三年江戸市ヶ谷邸に薨す。年廿五。立公と諡す。

明治維新前後

尾張之部

植松茂岳

小字啓作、通稱庄左衛門、號は松陰不知等。尾張の士小林常倫の次子、寛政六年十二月十日名古屋流川に生る。幼にして父を喪ひ家貧なり。國學を植松有信後に本居太平に學ぶ。後植松氏を嗣ぐ。その學深く門弟日に門に滿つ。皇道を弘むるを任じなし、忠烈言行に溢る。著す所皇國大道辨・君臣說・松陰集等あり。尾張志の編纂、六國史校合に従ふ。安政五年藩主慶勝幽せらるゝや之に坐して獄居す。慶應三年明倫堂國學教授に進む。曾て慶勝に従ひ京に入るや華頂宮に古事記を進講す。明治六年大講義に補す。九年三月廿日熱田に歿す。年八十三。昭和區瑞穂神宮共有墓地に葬る。明治三十六年從五位を追贈せらる。

茜部相嘉

幼字謙太郎、通稱初め平太、次に平十郎、又三十郎後に伊藤五、致仕して介といふ。誠壽園。尾藩の世臣藤井六郎治の長子。寛政七年十一月廿三日に生る。伊藤庄平に養はれ、小普請組に列す。その祖美濃稻葉郡茜部村の出身なるが故に姓を改む。天保二年大番組たり。天保十年藩主後繼の折、慶勝を推し金鐵黨を組織して大に勤皇に努む。

後年勤皇を唱ふる者之より多し。後清洲代官たり。性嚴直忠純風に勤皇の志を懐き田宮等と往來す。國學を鈴木
履に學び、古事記・六國史を校合し古事記傳追繼考、雅言集・水内神社考等を著す。慶應二年十二月三十日卒
す。年七十二。白川町光明寺に葬る。

國枝松字

名は惟照、字は成卿、號は松字・老足・東部・元山等。俗稱大野屋嘉六。寛政八年四月七日、名古屋に生れ、蠟燭商
を營む。少うして學を好み奥田鷲谷に就く。義を好み孝を以て賞せらる。赤穂義士の遺聞を蒐め數十年を閱して
義人録補正二卷を著し、明治十一年聖駕巡幸の日之を上る。尊攘の論起るや諸士と交り、門下に勤皇の事を勵み
し丹羽花南、田中夢山等を出す。明治二年神宮掛附屬、四年漢學一等教授に任ず。明治十三年十月十五日歿す。
年八十五。新榮町宗圓寺に葬る。

伊藤藤兩村

名は逸彦、字は民卿、通稱民之輔、兩村と號す。寛政八年三月十五日、愛知郡豊明村香掛新田中島に生る。經書
を永井星濱に學び、後昌平襲に入り、帷を名古屋に下す。郷に歸り、庄屋職を繼ぎ、庶政を更新し、常に國事を
憂ひ、時々藩主成瀬侯に建白し、郷塾を開き、徳風近隣を被ふ。成瀬侯、刈谷藩土井侯之を招けども辭し、月數
次土井侯の爲めに講筵を開く。兩村の門來り學ぶ者百を以て數へ、松本奎堂も來り學び、こゝに始めて勤皇の大

義を鼓舞さるゝに至る。其他門人に中島義信、横井信之等あり。嘉永五年、門人相謀り、碑を二村山に建つ。著
書に群雜割據錄七卷、芳野紀行等あり。安政六年七月十五日歿す。年六十四。

鶴飼吉左衛門

名は知信、字子熊、通稱吉左衛門、號は拙齋・晴翁・廣邦といふ。新之右衛門眞教二男。寛政十年二月十二日中
島郡起町小信中島に生る。文化六年叔父水戸藩士鶴飼知益の養子となる。常に精神間に入出入し、尊攘の大義を唱
へ、又河内・和泉の社寺に楠公の遺跡を訪れ、舊記遺聞を編し山陵考を著して献す。外國との通商を沮み攘夷を
行はしめんとし、同志と謀り、安政五年八月十七日子知明をして密勅を藩邸に捧ぐ。是れ安政大獄の因をなし知
信父子捕られ、安政六年八月廿七日傳馬町の獄に斬らる。年六十二。明治廿二年父子共に靖國神社に合祀され、
同廿四年父子共に從四位を追贈せらる。

阿部伯孝

字士錫、通稱、初は富三郎、次に清兵衛後に八助、號松園、尾藩士清兵衛の子。天保七年本丸番を相續し、少く
して天野恬庵に學び、天保十四年八月明倫堂教授たり。後江戸に住み、弘化四年營中講書を掌る。以後明倫堂督
學たる事三回、義宣の侍講たり。性忠實恭謙、諸生を薰化し德行を修む。海外多事となるや、侍講として正義以
て幼主を輔け勤皇の志を固からしむ。故に反對者忌みて連坐の罪に陥れしも、復職後、宿學故老を以て國事に献

替す。慶應二年五月十六日歿す。年六十六。鍋屋町教順寺に葬る。明治三十六年從五位を追贈せらる。

八

田宮 如雲

名は篤輝、字は子志、通稱剗太郎、後如雲と改む。號は桂園・桂叢。尾藩世臣大塚正甫の次子。文化五年十月廿三日に生る。同藩士田宮半兵衛の嗣となり、中興小姓より執政に至る。性謹厚忠直、陽明學を奉じ詩文に長じ、桂園遺稿・陸王合抄を著す。よく藩主慶勝を輔けて内藩政を改革し、外天下の志士と交る。安政五年慶勝幽せらるるや之に坐して蟄居す。長州征伐を初め、屢軍務に従ひ、維新の鴻業に貢獻するところ多く、尾藩をして諸藩の中に重からしむ。明治二年五月名古屋藩大參事に任じ、四年四月十九日卒す。年六十四。日出町徳林寺に葬る。明治十八年從四位を追贈され、廿三年孫鈴太郎を華族に列し男爵を授けらる。

高田 快清

通稱治右衛門後に務、退隱中は耕齋と號す。世々成瀬氏に仕ふ。文化五年十二月二日生る。文政五年父直明の後を繼ぎ、取次役より側用人に至る。よく主正住・正肥に仕へ本藩の田宮如雲と親交あり。心を合せて勤皇の事に盡す。尾藩勤皇の業は牛ば成瀬氏に俟ち、成瀬氏志を暢せしは快清等に依る所多し。鳥羽伏見の戦、同年四月甲信の役にも出兵す。明治二年犬山藩大參事たり、四年辞す。八年三月十二日歿す。年六十八。筒井町情妙寺に葬る。明治三十六年正五位を追贈せらる。

長谷川 敬

字は子文、通稱惣藏、號は拙齋・是風、高須藩の世臣、昭の長子、文化五年正月十三日生る。九歳藩校日新堂に學び、日比野秋江・春溪に漢學を承け風傳流槍術、長沼流兵學等を究む。廿七歳世子慶勝の近侍たり。主宗家を繼ぐや、名古屋に移り、田宮・丹羽と志を同し弊政を改革す。又安政皇居炎上の折宮城の擴大に奔走す。常に慶勝の意を含み公武合體に盡瘁す。征長の役その帷幄に參す。明治元年三月退き子弟を蕭關す。十九年一月三十日歿す。年七十九。白川町西光院に葬る。三十六年正五位を追贈せらる。

尾崎 忠征

初大之助、後八右衛門、晩に入衛。尾藩の世臣。忠實の子。文化七年六月十八日に生る。初封事を上り、藩政改革を議す。慶勝之を器とす。安政中密使を近衛家に致せし爲め、幕府之を幽すること數年。後各宮家堂上家に入、國事に關し公武間を斡旋す。慶勝後願なく王事に盡瘁し得たる功は歿す可からず。版籍奉還後、名古屋藩少參事たりしも退きて京都岡崎に寓す。明治廿三年三月九日卒す。年八十一。東山黒谷に葬る。明治三十六年正五位を追贈せらる。

小西 有三

九

字は剛長、初名は直記、後有三と改む。鷹司家の士願長の子、文政九年九月十九日京都に生れ、女御及び四條家に仕ふ。夙に大義を唱へ志士の間を奔走す。七廻長州に走るや之に従ふ。四條隆謨其一人なり。共に辛苦を嘗む。明治元年隆謨の子隆平に従ひ、參謀加勢に任じ、北陸に轉戦し參謀する事多し。十五年十月熱田神宮權宮司となり、十八年歿す。年五十五。門前町極樂寺に葬る。

水谷民彦

名は磐根、小字貞五郎、通稱與右衛門、俳號素桃、名古屋笹屋町酒舖日比野茂左衛門次子。文化十五年三月十六日生る。人足間屋水谷氏を嗣ぎ、道中改御用を命ぜらる。植松茂岳に國學を承け勤皇を唱へ、志士を慰ひ、家業を利用して諸藩の情報を蒐め、策源の資に供す。又攘夷の鬱憤は發して繪巻を描き、藩主及粟田宮に上り、十年を閲して三傑年譜卅卷を著し天覽に供す。明治元年式内改訂掛、後愛知郡川名村川原神社、他數社の祠官を兼ねしも十年三月辭し著述に従ふ。廿四年九月廿二日末森山に歿す。年七十四。小川町法華寺に葬る。大正二年從五位を追贈せらる。

鬼頭忠純

字子純、通稱忠次郎、長庵、世々尾張藩の小吏にして、廿一歳京都藩邸の書記となる。春日潜庵に入門し、歸藩後田宮如雲に用らる。安政五年藩主幽せられ、忠純散職となるや、同志と交り尊攘を唱ふ。文久二年藩主の幽を

解しも國事に與らしめざるを以て、大に周旋し、尾藩の振起に努む。後江戸に赴き、弘道館に勤務す。文久三年正月十六日歿す。年四十三。城北杉村普光寺に葬る。其作る所の詩若干編あり。

千賀信立

字は有邦、通稱與八郎、號担川、甫信の長子。文政五年十一月廿三日生る。始め船奉行たり。性沈著武藝に長じ、殊に西洋兵學に通じ、大砲を船に据付て常滑沖に試射し、知多海岸に砲台烽火台を營み、自邸に火藥製造所を設く。征長の師起り藩主慶勝總督たるに従ひ、又鳥羽伏見の役にも、北越にも出兵せり。又會津圍城に戦功あり。藩の權大參事に至る。明治四年陸軍少佐に任ぜられ、徵集隊一大隊を率ひ上京す。明治五年六月廿三日家に歿す。年五十一。知多郡須佐正業寺に葬る。大正二年正五位を追贈せらる。

加藤備

通稱秀之進、字は元秀、號は誠齋又東山逸士。世々醫を業とす。三歳にして父大進を失ひ、醫學を藩醫淺井・二村氏に、儒學を吉田文淵に承く。性風度秀雅、慷慨義を尙び氣節あり。勤皇の志士勢に投ずれば、家に留めて厚遇す。明治元年二月藩醫となり、近藩に勤王の勸説を命ぜらる。十月京に上り、監察判司事に拜し、二年五月致仕、六年十一月十八日歿す。年五十二。西區橋詰町慶榮寺に葬る。

若井重齋

通稱嶽吉、初名は成章、後重齋。文政五年四月十五日名古屋杉村町に生る。小納戸詰となり、性嚴正素朴、細野要齋に程朱學を修め、夙に尊攘の志を抱き、安政五年攘夷戯語一卷を著し、撫民安國の後攘夷すべきを述ぶ。慶勝に従つて上京し、公卿諸藩士に出入し、機務に與り、征長の役大功あり。慶應元年明倫堂主事、翌年留書頭たり。明治六年眞清田神社祠官、翌年權大講義、廿年勸解使となる。廿三年十月卅一日歿す。東春日井郡守山町利海寺に葬る。年六十八、大正十三年從五位を追贈せらる。

釋 雪 州

知多郡大野町海音寺住職、彭國和尚のひ、號は律洲・松琴。中島郡山崎村小川仁右衛門の子。鷺津益齋に學び殺堂と善し。性娟介、勳皇の志厚く開港説を抱き志士と交り幕府の忌諱に觸れし者を慰ひ、塔頭怡雲院は志士の密所たり。維新後寺内の一部を教場とし、大野學校の基を作り、國産隆興を説き、寺庭に桑を植ふ、養蠶を奨励す。晩年南畫を善くす。明治四年隱居し、三十一年五月九日寂す。年七十六。

德 川 慶 勝

初名は義恕、又慶恕後に慶勝、號初は盛齋後に月堂、幼名秀之助。高須侯松平義建次子、文政七年三月十五日江戸四谷邸に生る。廿六才宗家十四世を嗣ぎ、諸政を改革し、尊攘の議起るや、挺身以て王事に努め、一時幕府之を陶す。征長の役總督たり。大政奉還には公武の間人に周旋するあり。又皇居造營に檜材を献じ、楠社造立を建言

林 美 香

し、藩論を統一し、近藩勳皇の事を勸説す。慶應三年十二月議定に任じ、殘賊を平げ、卒先して版籍奉還を行ひ、從一位に叙し、侯爵に列す。明治三年名古屋藩知事に任じ八年四月 明治天皇東京淺草瓦町の邸に行幸あり。十六年八月一日東京に薨す。年六十。東大久保西光庵に葬る。文公と謚す。

林 金 兵 衛

諱は重勝、東春日井郡上條村關田の素封家、文政八年元旦に生れ、邸内に私塾を開き、壯丁を訓練す。安政五年總庄屋となり、元治征長の役には物資を調達す。明治元年農兵(草薙隊)を率ゐ、田宮如雲に従ひ、京伏見の警衛に任じ、甲信の役にも同隊三百人を率ゐて献策する所多し。後美濃太田に屯し、又各務原に屯田して三百余丁を開墾す。明治十三年東春日井郡長に任じ翌十四年三月一日歿す。同村宇正光寺墓地に葬る。年五十七。大正十三年從五位を追贈せらる。

青 木 可 笑

字は孟純、號は樹堂・鷲巢、僧時の名は祖方、字は陽春。文政八年に生る。名古屋の人。初僧と爲り、二典を究め大高村長壽寺に住し、經史を授く。遠近來遊する者多し。尊攘論起るや心を經世に留め、田宮松本等と交り、藩主に献策する事多く、明治元年東征の折藩の密使として周旋五十日餘、慶喜をして城邑を納れ謝罪せしむ。三年藩命により士に還俗し、漢學一等教授次で權大屬に任じ、五年致仕、八年大藏省租稅寮屬官となり、十四年四月十五日卒す。年五十七。谷中天王寺に葬る。

鷲津 宣光

字は重光、通稱郁太郎、後九藏、號は毅堂。丹羽郡丹羽村の人。文政八年十一月八日に生る。廿才父益齋を襲ひ初は伊勢猪飼敬所に、次で昌平覺に學び、詩文を善し、經史に通ず。初め久留里藩に仕えしも、尾藩に召され明倫堂督學に進み、學制を改革す。維新の折藩主慶勝議定官として上落するに従ひ、公武の間を奔走して献策す。明治元年權辨官事、十四年東京學士會員、十五年司法權大書記官に進み、勳五等に叙し雙光旭日章を賜ひ、十月五日卒す。年五十八。谷中墓地に葬る。大正四年正五位を追贈せらる。

本多 雪堂

通稱彦七郎、犬山藩世臣、文政八年九月十三日犬山に生れ、初片山平四郎といひ本多家を嗣ぐ。藩主を輔けて大義を説き、大に奔走す。鳥羽伏見の役禁門を守衛し、藩主二條城受取の命を受けるやよく之を輔く。維新後藩の軍務總教及學校總教に任ず。程なく辭し閑地に就き、明治十七年八月歿す。年六十。犬山町内田瑞泉寺に葬る。大

正二年從五位を追贈せらる。

間島 冬道

初名正興、又は正休、通稱萬次郎、尾藩の世臣正盈の子、文化九年生る。初め植松茂岳に學び、藩命にて大阪に出で、景樹の門熊谷直好に就く。勤皇の志厚く、藩主幽せらるゝや之に坐し蟄居す。明治に至り徴士となり、諸官を歴任して、十九年十一月御歌所寄人となる。歌集・伊香保日記等を著す。明治廿三年九月廿九日東京に歿す。年六十四。

鵜飼 幸吉

通稱幸吉、字知明、吉左衛門の子、文政十年京都水戸藩邸内に生る。父と共に勤皇の事に努む。武術を嗜み、福地廣延を師とし、神發流砲術を究む。銃砲遠距離射撃に關する著百數十卷ありしも蛤門の役に灰燼に歸す。安政六年八月二十七日、父と共に傳馬町の獄に斬らる。年三十三。明治二十二年父と共に靖國神社に合祀され、二十四年十二月從四位を追贈せらる。

八木 彫

字鑿之、號柳陰後萃堂と改む。通稱銀次郎、犬山藩士、文政十一年九月廿三日生。少より學を好み、詩文を善くす。藩營教授たり。文久中、慶勝解幽に奔走す。成瀬正肥、賞して備官兼秘書とす。征長の役、機密に參し、戦はずして事を治む。明治元年、正肥甲信を討つや參謀として劃策す。二年犬山藩參政、次で諸陵權助、神祇官、教部

省、内務省を歴任、廿四年辭し、名古屋に在りて詩歌風流を事とす。三十六年正五位に叙す。晩年美濃御嵩町に住し専ら和歌を誦し戯畫を餘技とす。葦堂存稿はその詩歌集なり。明治四十三年四月三十日卒す。年八十三。名古屋覺王山に葬る。

近松 矩 弘

通稱彦之進、新七郎の子、文政十二年八月十三日生る。弘化元年家を嗣ぎ、馬廻に列し、家學一全流練兵傳、長沼流軍學師範たり。祖茂矩は藩祖義直の勤皇の主旨を傳へ、矩弘その遺訓を慶勝に傳へ田宮如雲等と大義を贊し國事に盡す。慶勝幽さるるや、之に坐し發居す。藩内志士奮起し、甲府及び水藩某加り、矩弘亦應ぜし如雲之を止め機を待たしむ。文久中藩勳皇黨硬塞され、志を得ず、矩弘同志と謀り、慶勝を復し奸を除かんことを上書し、成瀬正肥邸に到り、若し猶豫せば同志東下して事を成さんとす、正肥之を諾し努力し、志士素志を遂ぐるを得たりき。征長役鳥羽伏見役功あり、二條城受取の際藩兵長たり。明治三年名古屋藩大屬に任じ、廢藩に到り罷む。明治四十二年十月二十五日卒す。年八十一。

間宮 正 萬

初め直教、後正萬、初め金之丞、次に外記次で六郎と稱す。天保二年名古屋に生る。父を嗣ぎて寄合となり、萬延元年寄列となる。慶勝征長總督たるに従ひ大功あり、後歸つて藩の執政となる。大政奉還に際し、慶勝召に應じ入朝し、六郎幼主を幫けて名古屋に留守しよく治む。明治元年慶勝に従ひ、北越出征の途次、美濃太田に出張

し、作戰の機密を掌る。二年少參事として藩政を革め、又東方總督として該地民政及部兵の訓練を擔當す。廢藩後は出でず、徳川家の相談役たり。明治三十五年十二月廿六日歿す。年七十二。八事山興正寺に葬る。大正二年正五位を追贈せらる。

佐藤 宣 準

通稱九郎三郎、號靜齋、尾藩淺野高成の三子、農政廳屬吏佐藤宣敏の嗣と爲る。性純實率直、人と國體時事を論じ、合はざれば去る。明治元年東征の勅命下るや國老千賀氏に従ひ、正氣隊軍監と爲り、越後雪嶺にて大に賊軍を破り、五月三日三島郡鴻巣村にて防戦せしも、彈藥盡き力戦して斃る。年三十六。同年十二月城東練兵場に藩士東征陣歿者の遺靈を祭り、後昭和區廣路町川名に一祠を營み合祀す。明治三年西春日井郡小田井村長善寺に遺髮を葬る。

渡邊 正 蔭

通稱鏡次郎、後に勲彦、號は醉々。尾藩の世臣。文久二年慶勝幽を解かれ江戸に在り。藩中權臣跋扈し慶勝を戴く金鐵組志を舒ぶる能はず。七月正蔭密に命を受け江戸に下り權臣の罪狀を擧げて幕府に上書す。時に幕政改革に際し諸事緩和策に出ず。九月成瀬正肥の出府により、幕府乃ち竹腰を幽し、尾藩他の權臣を處分す。藩主慶勝再び國事を司り、正蔭馬廻より小納戸となる。又征長の役鳥羽伏見役に奔走す。明治二年十月名古屋藩權大參事、十二月軍務判事たり。四年罷め、知多郡八幡に移り、教育に従事し、明治八年八月十四日卒す。年四十二。

角 田 忠 行

天保五年十一月六日、信濃北佐久郡岩村田に生る。姓は紀氏。父忠守尊皇の念厚く感化強し。安政二年脱藩、藤田東湖の塾に入り又平田鐵胤に學ぶ。文久三年上京、等持院足利氏木像の首を斬る。幕吏探索嚴しく姓を變じ、澤柳雜掌たり。明治元年正月澤宣嘉九州鎮撫總督たるに従ふ。二年藩主より國事に盡力せしを以て賞せらる。十年熱田神宮宮司に任ず、爾來同神宮の御神威の愈々上りしは忠行與りて功あり。大正三年辭任、七年從四位に叙す、十二月十五日卒す。年八十五。墓は八事山神葬墓地にあり。

成 瀬 正 肥

小字欽之助、次に小吉、號雙山、丹波篠山城守青山忠真三男。天保六年十二月十二日江戸に生る。安政二年準人正正住の嗣となり、四年家を嗣ぎ準人正、次で主殿頭に任ず。正肥より藩主慶勝を輔け、王事の爲めに主家に盡く劃策する所多し。其臣下中能く正義有識の士を任用し、國事多端の際、尾藩の勤皇を完うせるは正肥の手腕に待つ所大なり。明治二年七月大山藩知事に任じ、三年七月廢藩置縣により免ぜられ、十七年男爵、次で子爵に列し、三十六年正三位に叙し、同年二月四日薨す。年六十九。名古屋矢場町白林寺に葬る。

久 野 賢 宗

通稱長一、尾藩の世臣、維新の際、農兵より成る正氣隊長となり信越に轉戦して勳功あり。明治三年、名古屋藩

渡 邊 三 田 丸

少參事たり。同藩同隊戦死者の爲め岐阜縣可兒郡土田に碑石を建て其靈を弔ふ。撰文は賢宗、明治四十三年十二月廿三日逝去。年七十五。

野 崎 知 包

通稱彌七郎、天保十年七月七日に生る。名古屋本重町に住す。明治元年津田九郎次郎の隊に屬し、北越に進軍し、五月二日越後檜峠にて戦死す。年三十。同國魚沼郡一之宮村吉祥寺に葬る。遺髪は名古屋高岳院に埋む。

都 築 泰 觀

字子齊、小字綱太郎、次に安三郎、後に九郎右衛門、號は忍齋、松風館等あり。尾藩の世臣、頼母泰常の子、五百石を食み、目付を爲る。學を好み詩を善くし名流と交はる。性慷慨國事を憂ひ志士と往來す。田宮如雲諸子を誡めて曰く、交りて益を受くべきは都築忍齋・荒川敬齋なりと。維新後國事に盡せし功により、賞典祿中百石を賜ふ。明治三年三月廿一日卒す。年三十二。東春日井郡守山町大森寺に葬る。

福田 秀一

字季穆、秀一と稱し、號は瓶城。寛逸の子、其先は甲州の士にして、尾藩の國老生駒氏に從ひ尾張に徙り、後商と爲る。天保十年七月名古屋東田町に生る。年十七江戸昌平覺に苦學し、足利學校に遊ぶ。性峭直慷慨尊攘を唱へ、諸國の志士と交り、松本奎堂・藤田小四郎等の義舉にも關係あり。諸藩公卿の間に勤皇を唱道す。慶應三年遂に捕へられ、名古屋に幽せらる。明治三年七月十日歿す。年三十二。南小川町宋吉寺に葬る。明治三十八年從五位を追贈せらる。

尾崎 良知

八衛の次子、天保十一年九月七日、名古屋に生る。曾て荒川家を嗣ぎ甚作と稱す。幼より側儻大志あり、資性謹嚴早く慶勝の小姓頭取に班す。専ら尊攘を唱へ、士風鼓舞に力め、慶勝と去就を共にす。征長の役功あり、維新の大業翼賛を以て慶應三年田宮如雲等と參與を拜す。明治元年三月辭職歸藩、熱田神宮奉行たり。慶勝後尾崎氏に復し、御器所に歸て農に從ひ、又藝舎を設け、徳川家の顧問となり、明治三十四年歿す。年六十二。八事興正寺に葬る。明治三十六年從四位を追贈せらる。

松山 義根

初名松太郎、又庄七、丹羽郡樂田村に生る。明治元年正月、藩命により松本暢と共に壯年子弟を集めて、礮隊を組織し、その參謀となり、二月有栖川總督宮に屬し、東海道を下り、五月上野彰義隊を討ち、奥州を鎮定する

等戦功多し。四年廢藩後歸農す。明治五年、學制發布と共に村に義校を設立す。十二年丹羽葉栗郡長たり、次で縣・郡會及び衆議院の議員に當選せり。廿九年歿す。年五十六。

水谷 忠厚

幼名松次郎、尾藩士傳右衛門の子、天保十三年名古屋に生る。明倫堂に經學を修め、明治元年命を承け美・信・甲に勤王を遊説、二年京都に在勤中、春日潛庵に陽明學を學ぶ。廢藩後製粉製麵に従事せしも失敗し、瀬戸に往復して陶器薪炭を運ぶ。瀬戸の西、今坂の峻嶺を愛へ、自ら率先して鋸を携へ、これを削平せんとし、明治十三年五月事を竣ふ。又矢田川の架橋を企て、自ら天爵大神と稱しき。會々 明治天皇御巡幸あり三條公等に聞え親王貴神の金を寄する多く、明治十七年十月竣工す。明治廿四年四月五日歿す。年五十一。

中村 修

名政和、通稱修之進、尾藩の世臣、天保十四年十一月廿五日名古屋人參畑に生る。學を細野要齋に受く。性忠篤君子として推さる。尊攘論喧しき折、田中不二麿・丹羽賢等と屢々連署して藩老に呈す。慶應元年馬廻組となり、成瀬氏に從ひ、大阪に下り、志士と交遊す。三年京都留守居を命ぜられ機密掛となり、公卿諸藩を奔走、同十一月慶勝上洛、成瀬田宮等と共に勤皇の藩論を一定し、維新の大業を翼賛す。又肥後藩論を一定して勤皇に向はしめ、明治元年桑名藩を歸順せしめ、且藩中黨を立て、替に幕府に通する者を罪し、藩の動搖を止めしは修の功なり。明治二年名古屋藩權大參事より宮家家令を歴任し初代名古屋市長たり。大正四年六月六日卒す。年七十三。

死に先ち正五位に叙す。八事山に葬る。

田中不二磨

初め、國之輔と稱し、夢山・靜淵と號す。尾藩の世臣儀兵衛の子。弘化二年六月十二日代官町に生る。國枝松宇に經學を學び、丹羽淳太郎・中村修之進等と交り勤皇の精神を鼓舞し、金鐵組の一員たり。十八歳家を繼ぎ、寄合組より明倫堂助教並に到る。藩主慶勝の前に書を講じ時務策を作り賞賜され人の重んずる所となる。慶勝幽閉中丹羽賢と共に竹腰派の佐幕と頑頑し、よく尊攘論の維持に努む。後上京し縉紳に出入し志士と交り王事に勤む。慶應三年參與、後文部大輔・司法卿・フランス公使・司法大臣・樞密顧問官に到り、正二位に叙し子爵に列す。明治四十二年二月一日薨す。年六十五。東京谷中墓地に葬る。

丹羽賢

字士覺又大受、幼名錠太郎、後淳太郎、號は花南・大受。明倫堂督學參謀氏常の長子、弘化三年五月三日長辨筋に生る。國枝松宇・宮田圓陵・松本奎堂に従學し、尊攘論起るや、田中不二磨等と屢々書を藩老田宮如雲に上り、失敗を論ず。慶勝賢を重用し、慶應三年明倫堂總裁に進み、學制の改革外國語の普及、泰西學藝の輸入に努め、藩主に勤め大政奉還を献言せしむ。又慶勝の弟を擁し幕軍に應ぜんとする一派を誅し、近藩に王事に努むるを説く。明治九年五等判事、翌年致仕、十一年三月東京に歿す。年三十三。東京谷中墓地に葬る。大正二年從四位を追贈せらる。

志水忠平

通稱錄次郎、後に武雄。忠賢の長子。嘉永三年五月廿五日に生る。文久二年家を嗣ぐ。知多郡大高を采邑とし、海岸軍備を掌る。征長の役十五歳にして總督慶勝廣島に在る時、よく國內の守備に任す。慶應三年前藩主慶勝上京して維新の大業を翼賛す。藩士中幼主を擁し大坂に走り幕府を佐けん謀る者あり。其黨忠平に説けども忠平間宮六郎と共に諸士を戒め、藩の方向を誤らざらんことに努力す。時に流言百出、慶勝朝命を奉じ巨魁を誅し一藩勤皇の志を固くす。明治元年八月南方總督たり。二年以後名古屋藩大參事、集議院議員、名古屋市長等に任す。三十七年九月廿三日卒す。年五十五。名古屋高岳院に葬る。

荒尾精

幼名一太郎、後ち精、本名義行。號は耕雲後ち東方齋。尾藩士義濟の子。安政四年生る。枇杷島の人。士官學校を出で少尉に任す。大志あり、支那經綸を企つ。明治十八年參謀本部支那課に勤務、翌年支那に遊び年少十餘名之に従ひ、地理人情を調べ、他日に備ふ。日清貿易研究所を上海に創め、日支貿易の基をなす。その養成せる士多く日清の役に通譯官として軍務に盡す。明治廿九年十一月廿八日臺北にて歿す。年三十八。大正四年其愛國の志を嘉みせられ從五位を追贈せらる。

徳川義宜

字世輔、幼名は徳成、後義宜、幼名元千代、慶勝の第三子、安政五年五月廿四日尾州に生れ、六歳にて尾藩十六

世を襲ふ。明治元年正月父に代り禁園守護、次で桑名城守護、慶喜親征には先鋒となり、從三位中將に至る。二年二月率先版籍奉還を奏す。三月兵庫に楠公社造營の舉あるや工を補ふ事を命ぜらる。六月名古屋藩知事に任じ、侯爵に列す。二月致仕。八年十一月廿四日東京に薨す。年十八。東大久保西光庵に葬る。靖公を諱す。明治三十八年正三位を追贈せらる。

釋 鼎 州

尾藩士井口久之亟の子、名は文隆、九歳、政秀寺にて剃髮、豊後廣瀬淡窓に學び、同國佐伯養賢寺に住せしも退き、永源寺に來往して禪を究む。性剛毅貞潔氣概あり、尊攘を唱へ堂上諸藩有志と交る。元治元年十月、尾藩慶勝征長總督として京に在り、乃ち參謀田宮如雲に面し干戈を動かさずして鎮めんことを説き、長州側をも折衝して遂に和成る。明治七年六月三十日、京都東福寺にて寂す。

高 木 秀 眞

通稱八郎右衛門、尾藩士、慷慨義を好む、専ら文武の道を講じ、和歌繪畫を善くす。藩主齊温薨じ嗣なし。幕府家齊の子を嗣させんとす。時に太平久しく文武振はず。藩の有志賢君を戴き藩政の更新を謀り支封の世子秀之助（慶勝）を迎へんとし、秀眞志士を代表し幕府に上書す。説容れられず幽せらる。乃ち和歌繪畫を弄び武事の古實を究む。後慶勝嗣ぐや重用さる。當時秀眞の門に出入する者を金鐵組と稱す。維新の際王事に盡瘁せるの士概に此系統に屬す。

松 本 暢

省庵と號す、信州の人。江戸にて丹羽賢と相知り、尾州に來り、御使番席雇となり、明治元年七月手筒頭格仰出され切米五十俵、二百五十俵の足高を受く。次で砲礮隊主領となり、王事に盡す。尾藩朝命により甲信を征するや、同隊信州詰として出陣、幕吏の在る各陣屋引繼を圓滿に行ひ、治績の見る可きあり、賞典祿二百八十石を受く。維新後東京に出で、明治四年十一月、司法權大判事・後大審院判事に任ず。

砲 礮 隊

鳥羽伏見役起るや、田中不二麿・丹羽賢等の發起にて土田鐵二等志士十八名、尾藩の聘に應じ砲礮隊を組織し、錦の肩章を付し、勤皇兵たるを示す。鳥羽伏見役の脱兵數百、師崎に上陸し其民を侵す。命により同隊到り、事無く治り武器を收め歸る。同志百八十余に及ぶ。同三月東征の軍に従ひ、一隊は信越に進軍、和峠方面、中野飯山方面筑摩川方面に三分して轉戦、且つ資金調達に當り高田にて戦終る。又一隊は有栖川宮警衛に當り、伊勢の三井、豊川・可睡齋等にて軍用金を徴發す。隊員の墓は昭和區廣路町新豊寺に在しも廢寺となり、大正十三年八事山興正寺に遷す。

正 氣 隊

美濃可兒郡の有志柳生豊綏、林宣親、兼松守誠、明治元年家産を傾け、遠近に於て勤皇の爲め一死報國を誓ふものを求め、八十名を得て出兵を藩に願出す。慶勝義宜父子その健氣なるを賞し、藩士久野賢宗をして率ゐしむ。

常に藩兵の先鋒となり活躍す。越後雪嶺・小千谷・片貝原等に奮戦、隊士本多又藏、佐光次郎、三宅清三郎、三尾文十郎は戦死す。凱旋後明治四年四名の爲め、同郡土田に碑を建て英靈を弔ふ。撰文は久野賢宗、書は副隊長兼松守誠なり。

三河之部

渡邊 華山

幼名源之助又虎之助、諱定靜、通稱登、字子安、又伯登、號華山後に華山。又全樂堂、昨非居士等と號す。田原藩世臣、寛政五年九月十六日生。儒を佐藤一齋、松崎謙堂等に學び、繪を谷文晁等に就く。家を繼ぎ家老職に至り、民政に寄與多く、餘暇讀書繪事に従ふ。常に外警に意を用ひ、蘭學を志し、高野長英等と尙齒會を起す。幕府の外船打拂を疊ひ憤懣論を著す。其他參海雜誌、缺舌或問、西洋事情御答書等の著あり。當時幕府蘭學一掃の意あり。天保十年思想問題に託し華山を田原に幽す。天保十二年十月十一日禁錮中門人との音信が藩に累を及さんことを恐れ自刃す。年四十九。田原城寶寺に葬る。又自らの墓碑に「不忠不孝渡邊登」と書す。明治廿四年正四位を追贈せらる。

鈴木 春山

名は強、字自強、通稱春山、號童浦、世々田原藩典醫、享和元年田原に生る。玄通の子、藩變成章館に學ぶ。強

記經倫、文政三年長崎に西洋醫學蘭學を究め、渡邊華山、高野長英と交る。春山は實に西洋兵學研究の先覺者にして兵學小識、銃陣初學抄、三兵話法、海上攻守說等の譯あり。又西洋兵式により隊伍を編制し、大砲を鑄造し、軍艦を造作せんと志せしも、醫業に阻まれ果さず。村上定平を勸めて高島秋帆に就き砲術兵式を學ばしむ。田原藩の武名を輝かせし隠れたる偉功あり。弘化三年五月十日卒す。年四十六。小石川區原町寂圓寺に葬る。大正二年正五位を追贈せらる。

三宅 友信

幼名綱藏、字友信、號毅齋、芳春、片鐵翁、田原藩主康友の庶子。文化三年十一月廿七日、江戸藩邸に生る。蘭學を修め、華山、春山に多數の蘭書購入を命じ、「他人不可入」の室を設け海外研究の志士會して研究す。時に田原藩嗣無く、國禁の學を講ずるは累を宗家に及ぼすを懼り、友信多病と稱し辭し益研學に努め括囊錄、柱隆鎖語、三河國誌等を著す。天保十年の賦に諸士揃えられ、藏書研究物の大部を失ひしも、華山の火砲鑄造、品川砲臺の築造鈴木必携(兵書)の出版等は此一派の研究に待つ所多し。又友信藩士に英語航海術の研究を命ず。息康保宗家を嗣ぐや之を輔け、戊辰の役忠誠を表し、版籍奉還に盡力するところありき。明治十九年八月八日卒す。東京本淨寺に葬る。昭和十二年從四位を追贈せらる。

村上 忠順

字承胤、號蓬廬又は蓬廬屋。忠幹の子、文化九年四月一日、碧海郡新堤村新馬場に生る。醫を名古屋加藤敬順に

學び、獨學にて國學を攻め和歌を詠す。蒐寫の書數萬、千卷題舎と稱す。明治四年迄刈谷藩典醫たり。時に和漢書を進講す。文久三年松本奎堂十津川の義舉敗れ、勤皇の士多く逃れ來り、幕吏の眼を冒して之を潜匿す。著書數十部中、古事記標註、新葉和歌集標註等有名なり。明治元年御東征に供奉し、後三河縣修道館助教、神祇局宣教使、祠官小講義を歴任、明治十七年十一月廿三日歿す。年七十三。

村上 範 致

通稱定平、後財右衛門、諱範致、號清谷、田原藩世臣、照寬の子、文政五年田原に生る。性質直道義を重んじ、藩士の擊刺を習はざるを慨し、杉村東七郎・齋藤彌七郎の門に學び聲名あり。江戸に出て渡邊雄山、鈴木春山と交り、海防の急を痛感し、高島秋帆に西洋砲術を究め、兵衛關係書の翻譯書を蒐め手寫を怠らず。西洋形帆船順應丸を作り沿海航海に従はしめ、自ら遠州灘に操縦す。又民政に心を用ひ海産業を教ふる所多し。安政六年執政に到り、明治二年大參事に任ず。明治五年四月十六日卒す。年五十一。大正二年從五位を追贈せらる。

山中 靜 逸

字子文、諱猷、通稱七左衛門、號信天翁、名靜逸、姓藤原氏。碧海郡旭村に生る。經史を大坂篠崎小竹に學び、家を繼ぎ子弟を教育せしも、勤皇の志篤く遂に家を讓り上京、星巖・雲濱等と交るに至り、文久三年上書して攘夷親征の詔を賜り、大學寮を復し人材を養はん事を請ふ。王政復古の諸朝令は岩倉の許に在りて、多く猷及び山本復一の起草に係る。明治元年御東征に金穀を調達、又東征の途次、庶政献の進言に依る事多し。維新後知事、宮

家家令を歴任、後京下加茂に自適す。十八年五月廿五日歿す。年六十四。東京青山に葬る。大正二年從四位を追贈せらる。

深見 篤 慶

通稱藤十、幼名友三郎、號松塙、外山三輔の長男、文政十一年十一月八日愛知郡豊明村東阿野に生る。廿四歳碧海郡新堀村深見氏を嗣ぐ。國學を村上忠順に學び武技を研く。尊皇敬神の念厚く、近藩を往來し、大義を説き、資を供す。則ち鳥取藩勤王の士河田以下廿二人の有栖川宮家にての保護、天忠組の義舉、明治元年御東征に磅礴隊赤心隊等の参加は篤敬に缺つ所大なり。維新後敬神勤學の風を奨励し、私費を以て神社を建設修復し、寺院を學舎に充つ。夙に橋守部等にも師事し、その師忠順の爲め珍籍古書四萬五千卷を蒐め千卷題家文庫と稱し、自ら國學和歌を上梓す。明治十四年三月廿五日歿す。年五十二。大正二年從五位を追贈せらる。

松本 奎 堂

名衛、字士權、諱孟成、通稱謙三郎、號奎堂、又洞佛子・燭川。刈谷藩文武の師印南の子。天保二年十二月七日生る。天資英邁、奥田桐園に就き、廿一歳昌平覺に學び、教授兼侍讀に任ず。廿九歳名古屋石町に教授す。尊攘論起るや妻子を離別し、西上して志士と交はり、文久三年志士等の親王を奉ずる義兵の議に加り、十津川に擧兵せんませしも事ならず淡路に隱る。同年六月昌明等と天誅組を組織し、大和に事を擧ぐ。利あらず、九月廿五日自刃す。年三十三。明治廿四年靖國神社に合祀せられ、同年從四位を追贈せらる。

宍 戸 昌 明

字子精、諱昌明、通稱彌四郎、號寧遠、又道一軒。刈谷藩士昌壽の六子、天保四年正月十四日刈谷に生る。性剛
膽大志、好みて兵書を讀む。嘉永六年米糶浦賀に入る。命により江戸藩邸を守り、幕吏窪田に山鹿流兵學を學ぶ。
安政三年歸藩、尊攘説を唱へんと決し、安政六年致仕、東西に遊び志士と交る。松本奎堂に會し中山忠光を奉じ
京より大和に入り、十津川に擧兵、合圖係を勤め、轉戦二旬、文久三年九月廿四日、鷺家口に挺身彦根の營を衝
き數十名を仆せしも鷺家川に陥り戦死す。年三十一。鷺家口明寺谷山上に葬る。明治廿四年靖國神社に合祀、三
十一年從四位を追贈せらる。

佐 々 木 市 兵 衛

天保四年磐海郡富士松村郷地に生る。小林大道に學び、山田鈴之進に武術を修め、常に尊攘説を説く。慶應三年
上京して土州兵に加り轉戦せしも王政復古と共に歸國す。刈谷侯臣となさんせしも既に 陸下の臣たるを以て
辞す。明治初年攘夷行はれず、歐米文物の輸入は遂に、神宮東京御動座説等を起す。即ち伊勢に赴き神宮守護を
願出でしも許されず、遂に暴徒と誤まれ捕はれしも逃れ歸り、復捕はれて京都六角の未決獄にて明治五年五月
七日歿す。年四十。大正十一年里人碑を建ててその靈を慰む。

倉 田 珪 太 郎

名宗之、通稱珪太郎、刈谷藩士彌平の子。嘉永四年、江戸赤坂藩邸に生る。江戸藩校に學び、後獨學にて和歌書
道を嗜み、藩主利善の蕭陶をうけ、志士と交り、大義に通じ、宣揚に努め上京して岩倉家に入る。慶應三年、藩
主に上京忠勤の勅命あれど應ぜず。珪太郎急ぎ歸國、老母の激勸を得、藩主に謁し、大義を説く。慶應四年二月
八日夜、佐幕の三家老を刺す。茲に藩論一定し、斬奸を賞せらる。次で刈谷藩版籍奉還に功あり。明治四年小參
事に任じ、後駿河清見寺に剃髮し、倉田清翁と稱し、三家老の菩提を弔ひ、横濱白瀧不動堂守となり更に近郷森
村の寺の住職となり自適す。大正六年七月十日、東京西大久保に歿す。年八十二。刈谷町十念寺に葬る。

昭和十三年三月十七日印刷
昭和十三年三月十九日發行

編輯者 市立名古屋圖書館內 森川 鉉 二

發行所 名古屋市總辦公署內 市立名古屋圖書館

名古屋市中區南大津通三丁目四番地

印刷人 英比貞造

電話中④四二四番

終

